

令和四年度 統一模試 中学三年 第一回

統一実施日 七月二日 (実施時間五十分間)

国語

注意

- 1 問題用紙は表紙を入れて八ページです。これとは別に解答用紙が一枚あります。
- 2 監督者の指示に従って、解答用紙を取り出し、番号と氏名を解答用紙及び問題用紙の決められた欄に記入しなさい。また、解答用紙の「QRコードシールをはる」と書かれたわくの中に、シールをはみ出さないようにはりなさい。
- 3 監督者の「始め」の合図があるまで開いてはいけません。
- 4 答えは、問題の指示に従ってすべて解答用紙の答えの欄に、はみ出さないように記入しなさい。
- 5 筆記用具は、HBかそれよりも濃いものを用い、文字がうすくならないように注意しなさい。
- 6 監督者の「やめ」の合図ですぐにやめなさい。

氏名

1 次の1・2の問いに答えなさい。

- 1 次の——線部のカタカナは漢字に直し、漢字は仮名に直して書け。
 - (1) 会社のチヨウレイに遅れる。
 - (2) テイリユウ所でバスを待つ。
 - (3) ヤサしい問題から解く。
 - (4) 南極で越冬する。
 - (5) 先生の指示を仰ぐ。
 - (6) 煩雑な事務手続き。

2 次の行書で書かれた漢字を楷書で書くとき、総画数が同じになる漢字を、次から一つ選び、記号で答えよ。

福

ア 選 イ 練 ウ 蒸 エ 善

2 次の文章を読んで、あとの1～6の問いに答えなさい。

〔(一)～(十四)は段落番号を示す。〕
本当のことを知るために、考えることを始めよう^アと決めた君、君はまず、「①「思う」と「考える」が、どう違うのかを考えられるようになる^ウ。」
(一)

「自分がそう思う」というだけなら、それが正しいか間違っているかは、まだわからない。自分ではそれを正しいと思っていたのだけど、他の人はそれを正しいとは思っていないかったとか、以前は正しいと思っていたのだけど、今は正しいとは思わないとか、よく気をつけてみると、そんなことばかりじゃないだろうか。だから人は、自分が思っていることが正しいことなのかどうか、常に「考える」ということを

するわけだ。

(二)
中にはこう尋ねる人がいるだろうか。でも、たとえば私は花を見て美しいと思うのですけど、私がそう思うのも正しかったり間違っていたりするのでしょうか。花を美しいと思うのが間違っているということもあるのでしょうか。
(三)

(四)
これはすごく鋭い質問だ。確かに、花を美しいと思うとか、遊んで楽しいとか、叱られて悲しいとか、そういうふうに「感じる」ことについては、それが正しいかどうかは言えないね。だって、本当にそう感じているのだから。
(四)

(五)
だけど、なぜ自分がそう感じるのかを考えてゆくなら、もっと不思議なことに気がつくはずだ。そう、花を美しいと思う時、それは花が美しいのだろうか、それとも a のだろうか。これはどっちが正しいのだろうか。こう考えてゆくと、やっぱり「自分が思う」の正しさについて、考えざるを得なくなるね。
(五)

(六)
b、叱られて腹が立つ。本当に腹が立っているのだから、そのことに正しいも間違っているもあつたもんじゃやない。でも、ひよつとしたら、腹を立てるといふこのこと自体が、間違っていることなのかもしれない。だとしたら、やっぱり考えなければ、間違いには気がつかないはずだね。
(六)

(七)
「本当にそう思う」ということと、「本当にそうである」ということとは、違うことだと覚えておこう。だって、間違ったことだって、自分がそう思っているのだから、「本当にそう思う」と思えるわけだ。でも、間違ったことを本当だと思つたって、間違ったことが本当になるわけ

じゃない。本当にそうであることは、間違ったことじゃない。やっぱりそれは「正しい」ことだということだ。(七)

でも、本当に正しいことなんて、どうやってわかるのでしょうか。それが自分が正しいと思っただけではなくて、本当に正しいことだとしてわかるのでしょうか。(八)

これは当然の質問だ。そしていちばん大事なことだ。君は今、「正しい」という言い方で、どういうことを言おうとしているのだろうか。(九)

こんなふうに考えてみよう。物の長さや大きさを計るために、定規というものがある。誰の持っている定規も目盛りは同じで、一センチは一センチと決まっている。もしこれが、使うたびに目盛りが変わったり、各人の持ち物で目盛りが全部違っていたりしたら、定規は定規の用を為さない。正しく計ることができないのだから、世の中の寸法は狂いっぱなしだし、建物ひとつ建ちやしない。(十)

これと同じことだ。自分が思っているのだから正しいと思っっている人は、自分ひとりだけの定規、自分ひとりだけの目盛りを使って、すべてが正しく計れると思っただけのものだ。各人がそういうんでんばらばらな定規を持って、お互いを計り合い、それが自由だと主張し合っているようなものなんだ。でも、正しく計ることのできないそんな定規を使って生きるなら、間違っただけのはずじゃないか。(十一)

しかし、人は、「考える」、「自分が思う」とはどういうことかと「考える」ことによって、正しい定規を手に入れることができるんだ。自

分ひとりだけの正しい定規ではなくて、誰にとつても正しい定規、たったひとつの正しい定規だ。それ以外に「正しい」とは、どういう意味だと君は思う？(十二)

そんな定規が本当にあるんでしょうかって、怪訝な顔をしているね。(十三)

あるんだ。どこに？ 君が、考えれば、必ずそれは見つかるんだ。

正しい定規はどこだろうってあれこれ探して回っているうちは、それは見つからない。考えることこそが、全世界を計る正しい定規になるのだとわかった時に、君は自由に考え始めることになるんだ。こんな自由って、他にあるだろうか。(十四)

(池田晶子「14歳からの哲学」所収「考える」(2)による。一部表記を改めた箇所がある。)

(注) 怪訝＝納得がいかない様子。

1 線部ア、エの動詞の中から、活用の種類が他と異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

2 本文中の a にあてはまる言葉として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

- ア 自分が美しさを疑っている
- イ 自分が美しいと思っっている
- ウ 花が美しく咲こうとしている
- エ 花は美しい

3 本文中の「b」にあてはまる語として、最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア つまり イ しかし ウ だから エ あるいは

4 次の文は、——線部①「思う」ことと、——線部②「感じる」ことに共通する内容をまとめたものである。□に本文の(一)～(四)段落中から最も適当な二十字の言葉を抜き出して書き、文を完成させよ。

思うことも感じることもそれ自体は□ということ。

5 ——線部③「本当に正しいこと」とあるが、筆者はどのようにすることで「本当に正しいこと」がわかると述べているか。本文中の比喩表現を用いて六十字以内で説明せよ。

6 本文中での筆者の主張をふまえた上で考えられる、本当のことを知るための手段として適当でないものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分が思い込んでいるだけかもしれないと自問し続けるとともに、物事を客観的にみるようにしていく。

イ 何が正しいのかを自分に問い続ける思考を持つとともに、考えるという行為そのものを大切にする。

ウ 自分や他者の意見が否定されない自由な場所を作り上げるとともに、自分の考えについての自信を高めていく。

エ 相手のことや周囲の状況もふまえ、自分の考えをたえず見直し、ていくとともに、自分の考えを深めていく。

3 次の文章を読んで、あとの1～3の問いに答えなさい。

秦の恵王、蜀の国を討たむとし給へるに、道絶えて、人通ふ境にあらず。はかりことをめぐらし、石の牛を作りて、牛の尻に金を置きて、ひそかに境の辺りに送り遣はず。そののち、蜀の国の人、この牛を見て、「石牛、天より下りて、金を下せり。」と思へり。すなはち五人の力

て、^①「石牛、天より下りて、金を下せり。」^②と思へり。すなはち五人の力

人をして、山を掘り、牛を引くに險しき山、平らげる道になりぬ。秦

の相張儀を遣はして、石牛の跡を見て、蜀の国を討ちとりてけり。

〔十訓抄〕による

(注) 恵王Ⅱ中国の戦国時代の秦の国の恵文王。

蜀Ⅱ中国の戦国時代の国の名前。

張儀Ⅱ中国の戦国時代の政治家。秦の恵王に仕えた。

1 ——線部①「思へり」を現代仮名遣いに直してすべてひらがなで書け。

2 ——線部②「すなはち」の本文中での意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア とうとう イ すぐさま
ウ つまり エ かえって

3 次は、本文をもとに話し合っている先生と生徒の会話である。

I Ⅳに適當な言葉を補って会話を完成させよ。ただし、Iには本文中から最も適當な三字以内の言葉を抜き出して書き、IIには十字程度、IIIには二十五字以内でふさわしい内容を考えて現代語で書き、IVはあとの選択肢から最も適當なものを選び、記号で答えよ。

先生 「本文中に『線部』はかりことをめぐらし」とありますが、これは『策略を練って』という意味です。本文における秦の恵王の策略はどのようなものでしょうか。」

生徒A 「はい。恵王は、蜀を討とうとしたときに、人が通ることのできる道を作りたいと考えていました。」

生徒B 「その手段として、まずIを作り、尻のあたりに金を置いて、それを国境の近くに運ばせました。」

先生 「そうですね。では、Iを見た人たちはどのような行動を起こしましたか。」

生徒A 「はい。『IがII』と思い、五人の力持ちに頼んで山を掘り崩し、Iを引かせました。」

先生 「そうですね。その後、この山はどうなり、秦の恵王はどのような行動をとって何に成功したのでしょうか。」

生徒B 「はい。険しい山はIII、蜀を討ちとることに成功したと思います。」

先生 「そのとおりです。この話からはIVという教訓が得られますね。私達もこの教訓をいかしていきたいですね。」

〔IVの選択肢〕

- ア 思いついた態度を取ってはならない
- イ 友人を大切にしなければならぬ
- ウ 人には親切にしなければならぬ
- エ 物事をよく考えなければならぬ

4 次の文章を読んで、あとの1～5の問いに答えなさい。

中学を卒業した廣作が、真希が営む萬總堂という経師屋に弟子入りし、その職人の和平の下で働き始めて三年経ったある雨の夜に、和平の知り合いである料理屋の女将の店で、弟子入りから今までのことを回想している場面とそれに続くものである。

鎌倉へ来てからの一ヶ月はあつと言う間に過ぎた。

廣作はただ和平に言われたまま掃除、片付けを懸命にした。

「いいか、何をやるにしても丁寧でなくてはいけないぞ。目に見えぬところの丁寧さが、最後には表へ出て来るからな」

和平の言うことのすべてはわからなかったが、廣作は言い付けを守って働いた。

或る夜、仕事を終え、風呂に入っていた廣作は和平に仕事場に呼ばれた。和平は作業場の電灯を天井にむけて照らすようにして、床を木板で打った。灯りの中に埃が舞っていた。

「ほれっ、これだけの埃だ。明日はここで金粉を撒く作業をする。埃が混じっただけで色味が変わる。埃はなかなか目に見えない。それに目をむけて掃除をしなさい」

そう言つて、和平は自ら濡れ雑巾と乾いた雑巾を持って掃除のやり方を教えてくれた。

「自分を無器用だと思え。無器用な分だけ人の倍も丁寧に仕事をやれ」

自分は無器用なのだと言ひ聞かせた。

ひと月が経った五月に、真希が一人の若者を連れて戻つて来た。龍也は廣作と同じ歳とは思えないほど如才なく、その上驚くほど手先が器用だった。仕事の呑み込みも早く、要領も良かった。一ヶ月もすると、龍也は訪ねて来た得意先の応対や仕事の電話を何年もいる職人のようにこなした。廣作は龍也を見ていて敵わないと思つた。

廣作は龍也の足手まといにならぬように、龍也の分まで下働きに励んだ。

真希は龍也を可愛がった。休みの日に龍也を連れて出かけることもあった。②そんな日でも廣作は和平に言われた仕事を一人で黙々と続けた。それが辛いとは思わなかった。

和平に言われて糊加減を覚えるのに二年近くかかった。それでも和平に満足して貰えるものはできなかった。

二年が過ぎ、龍也は建売住宅の建具の仕事に一人で出かけるようになった。廣作は相変わらず、出仕事は和平について行き、下仕事だけをさせられた。

その年の神奈川県技能コンクールで龍也は銀賞を受賞した。廣作は優秀賞だったが、それは出品作のすべてに与えられる賞だった。

龍也が仕事に不平を言いはじめたのは、それから間もなくだった。和平に面と向かつては口にしなかったが、廣作の前では和平の仕事の教え方を非難した。やがて龍也は真希に和平への不満を言うようになった。

③去年の冬、和平と龍也が仕事場で長く話していた夜があった。年が明けて龍也は廣作に店を出ていくことを打ち明けた。

廣作は自分一人がとり残されたような気持ちになった。

客は廣作一人になり、雨音が聞こえてきた。

「どうしたの？ 元気がないわね」

「べ、別に……」

「龍也君がいなくなって淋しいわね」

「……」

「いい競争相手だったものね」

「そ、そんな、龍也の方が、俺なんかよりずっと腕はいいし、奥さん

も、それから和平さんも気に入ってたんだけ」

廣作は怒ったように言い返した。

「奥さんはわからないけど、和平さんはあなたたち二人を別けてする人じゃないわ」

「ち、違うよ。女将さんは、何もわかってないんだ。和平さんは龍也に教えても、俺には、今もまだ教えてくれない仕事があるんだ」

廣作のむきになった言いように、女将が洗い物の手を止め、廣作を見つめた。廣作はばつが悪くなつてうつつむいた。

「三河屋さんのご隠居さんの離れの襖はあなたがやったんでしょう。ご隠居さん、誉めていたって話よ。萬總堂の職人の仕事はさすがに丁寧だって……。店に来た三河屋さんの人が言ってたわ。この話を和平さんにしたら、それは偶然だろうって。誉めてたって話、廣作さんにはするんじゃないって和平さんは言ってたけど、少しは誉めて貰わないとね。和平さんは自分のことも身内も決して良く言う人じゃないから……」

三河屋の離れの襖の貼り換えは、去年の暮れのあわただしい時に急に入った。廣作は和平に呼ばれて、初めて出仕事を一人でした。

——いいか、離れは伏せてらっしゃるご隠居さんの部屋だ。普通の人が見えないところに目がいく。いつも以上に丁寧にやるんだぞ。

仕事の段取りを言われた時、和平に釘を刺された。和平の言葉の意味が廣作にはわからなかったが、言われたとおり丁寧に仕事をした。

「それでも俺には、鎌倉の他の経師屋の若い衆が教えて貰ってることの半分も、教えてはくれない」

廣作の言葉が聞こえないかのように女将は話を続けた。

「和平さんはね、あなたが鎌倉に来てから深酒をしなくなったのよ。」

「あんなに好きなお酒を半分に減らしてんのよ。もう六十歳を過ぎた人が楽しみを我慢するって大変なのよ」

「そ、それはどういうことなの？」

「それは廣作君が自分で考えなさい。あなたは知らなくとも、皆があなたのことを見てくれることに少しは気付かなくちゃ……。人間は一人ぼっちなんかじゃないのよ。あなたの目には見えないところで、あなたのことを見守ってくれている人は何人もいるのよ……」

廣作は、その夜、店を出て由比ヶ浜を一人で歩いた。

雨は小降りになっていった。海は荒れていた。傘を閉じて歩くと、雨とも波の飛沫ともつかぬものが頬に当たった。誰かに頬を叩かれていく気がした。

——あなたの目には見えないところで、あなたのことを見守ってくれている人は何人もいるのよ。

先刻、女将が言った言葉が耳の奥に聞こえた。

⑤「見えないところか……」

廣作は沖合いを睨んで呟いた。

(伊集院静「冬のはなびら」による。一部省略等がある。)

(注) 経師屋Ⅱ書画を掛軸にしたり、襖・屏風などを仕立てたりする店。

如才なくⅡ気が利いていて、抜かりがないこと。

1 ——線部①とあるが、この発言で、和平は廣作に何を教えようとしたのか。最も適当な部分を、「こと」に続く形で本文中から二十四字で抜き出し、最初と最後の五字を書け。

2 ——線部②とあるが、一人で仕事に励む廣作の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 自分も真希と出かけた気持ちはあるが、和平に言われた仕事が片付かず、そんな余裕はないと感じている。

イ 自分もいつかは龍也に追いつけると信じ、今はこの立場を受け入れるしかない、自分に言い聞かせている。

ウ 龍也と違い、無器用な自分は、与えられた仕事にひたむきに取り組んでいればそれでいいのだと思っている。

エ 龍也と違い、真希に可愛がってもらえない寂しさを、自分の仕事に打ち込むことで紛らわそうと考えている。

3 次の文章は、なぜ廣作が——線部③の気持ちになったのかをまとめたものである。Ⅰには本文中の回想の場面から最も適当な六字の言葉を抜き出して書き、Ⅱには回想の場面の言葉を用いて十五字以内で書き、文章を完成させよ。

廣作は、真希は自分よりも龍也を可愛がっていると思っていた。そんな中、龍也がⅠことになった。そのうえ、廣作は、和平からはⅡので、自分一人が周囲からとり残されたような気持ちになっているのである。

4 ——線部④とあるが、女将はこのように言うことで廣作に何を伝えようとしているのか。女将の会話に出てくる和平の人物をふまえて、五十字以内で説明せよ。

5 ——線部⑤とあるが、この時の廣作の気持ちとして最も適当なものを次から選び、記号で答えよ。

ア 自分を陰で見守ってくれる人の存在に気付き、目に見えないところが大切だと言った和平の言葉の意味をかみしめている。

イ 自分を教えている和平の、目に見えないものを大切にしている姿勢に気付き、和平に不満を抱いていた自分を悔いている。

ウ 自分が見えないところで高く評価されていたことに気付き、自分も龍也に負けない仕事をしていこうと心新たにしている。

エ 自分が見えないところで見守られていることに気付き、自分も見えないところで他人に優しくしていこうと決意している。

5

ある中学校では、総合的な学習の時間に、優先席について学習し、話し合いをすることになりました。図1、図2は、これまで公共交通機関で使われたことのある優先席に関する表示です。あなたは、どちらの図が良いと思いますか。あとの(1)～(4)の条件に従って、作文を書きなさい。

図1



図2



条件

- (1) 一段落で構成し、六行以上八行以下で書くこと。
- (2) 図1、図2のどちらが良いと思うかを明確にすること。
- (3) 図1または図2を選んだ理由を述べる上で、選んだ図の良い点と、選ばなかった図の問題点を書くこと。
- (4) 原稿用紙の正しい使い方に従って、文字、仮名遣いも正確に書くこと。